

京の町並景観と寿岳章子

京都市立芸術大学名誉教授 街の色研究会京都代表 中村 隆一

今日は土曜日ですが、御多忙の中皆様たくさんお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。
さて、表題にありますように、寿岳章子さんの数々の出版業績の中から、特に京都の景観保存について貴重な調査研究をされた三冊の本についてお話ししたいと思います。

三冊の本というのは、1988年に出版された『京都町なかの暮らし』（草思社）、1992年に出版された『京に暮らすよろこび』（草思社）、1994年に出版された『京の思い出』（草思社）、以上の三冊であります。いずれも沢田重隆さんという有名なグラフィックデザイナーの、写真の如く綿密な写生がふんだんに挿入されていて、読むのは勿論、見ていて楽しい本であります。私がこの本に注目したのは、私事に亘りますが、京都において約40人位のメンバーで「街の色研究会・京都」という研究会を今まで28年間続けておりまして、色彩という側面から京都の景観の調査研究をやっております。そんなことから、最近になって章子さんのこの三冊の本が、発刊から30年になるのですが、昨今の町屋保存運動、崩れゆく京都の伝統建築、私たちの研究テーマの景観の保存・修復というテーマを考える中で、非常に貴重な本であるという認識がクローズアップされてきました。

少しこの貴重な本についての側面の話をしますと、一冊目の『京都町なかの暮らし』が出版された1988年の1年後、京都新聞が一年間の連載記事で“新・都の魁”という特集を51回かけてやりまして、その集成を出版いたしました。この本の内容は建築家集団の「京都デザイン研究会」のメンバーによる細密な図面と写生がいっぱいのもので、京都の51カ所の町並を活写し、そこに起きている問題点を2人の有能な記者がレポートしております。その本の編集内容や、挿画の雰囲気、この前年に出版された章子さんの一冊目の本と実によく似たレポートになっている事に私が感激し、また同じように、章子さんの3冊の本が京都の町並景観の保存運動の、いかにも魁となっている事に注目したのであります。30年を経た今になって、この京都新聞の“新・都の魁”と章子さんのこの三冊の本をゆっくりと綿密に読み、細密な建築や景観の情景を見ておきますと、30年の間に、我々が伝統的な京都の（日本の）建築や景観をいかに破壊し続けてきたか、これからいか

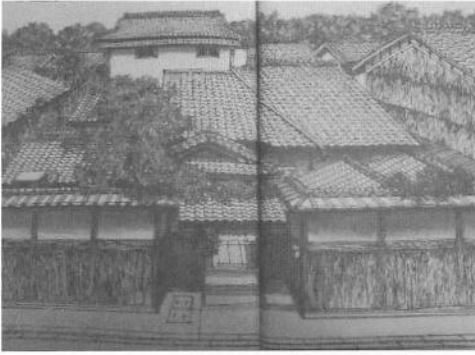


に修復・保存して行くべきか、ということを考えさせられます。前置きが長くなりますが、それでは順を追って、三冊の本について映像をご一緒に見ながら説明してゆきます。

まず一冊目の『京都町なかの暮らし』について、少し内容を説明いたしますと、この一冊は基本的に章子さんがお育ちになった中で、幾度か住まいを変えられましたその場その場の地域の特徴とか境界の人達との交流、ご両親、弟さんとの日常の心のふれ合いを、実に細かく記述してあります。章子さんがご両親と最後まで住まれた向日庵。この家に3人がいかに愛着を持ってこられたか、昭和8年に建てられた向日庵の成立から、住居としていかに優れているかということ、お母さんの弟さんの岩橋武夫氏と文章さんの交流、その中から生まれたお母さんと文章さんの恋愛、ご両親の深い愛の中からお母さんの英語の習得のこと、終生愛した向日庵でのお母さんの終焉のこと、等などが語られています。ご両親が京都で住みだした八条源田町境界のこと、その次には章子さんが生まれた東山三条古川町境界、大正13年ごろの古川町商店街の沢田さんの綿密な描写がすばらしい。またこの古川町の市場は現在も健在であります。

次には祇園町近くの南座裏での住まい、その周辺の縄手、花見小路、宮川町、建仁寺などの伝統的街並みの沢田さんの活写がすばらしい。その次に寿岳一家は南禅寺北門あたりに引っ越しされます。章子さんが女の子にしては、逞しい探検癖が開花し、元の祇園町から岡崎周辺まで歩き回る日常が記述されております。またご両親の生活を支える凄まじい家庭教師の仕事のこと、柳宗悦や河上肇博士をはじめとする多数の文化人との交流、近所の様々な南禅寺周辺の人びととの交流が生々しく記されております。この辺りで本人の住まいの話が終わって、終生京都との縁が切れることが無かった、京都の街のお店の探訪が始まります。

はじめに、寿岳家の衣料にまつわる店舗や衣料を自分の家で縫製したその当時の生活風習、次に食べ物にまつわる日常生活と意外と多い外食の店の紹介、東寺の縁日での買物、それぞれの風物や店舗が沢田さんの生き生きとした描写で綴られます。終章には「京の街の心暮らし」という項があり、京の伝統的な家並が崩れていく状況に警告を与えておられます。また古い洋風の建築をいろいろと取上げ、安定した揺るぎのない建物のたくさんある京の街を探訪し、濃厚な西洋と同化した京の文化を讃えておられます。特に寺町通りの鳩居堂、竹苞楼、旧丸善の建物、新門前や西陣の古い町屋、五条坂の河井寛次郎記念館、街中に点在する小さな地藏堂、などを沢田さんの細密な写真のような画像で紹介されています。河井寛次郎、柳宗悦、新村出先生と親子二代に亘る親交のくぐり文化史に残るべき貴重なことがらであると思います。



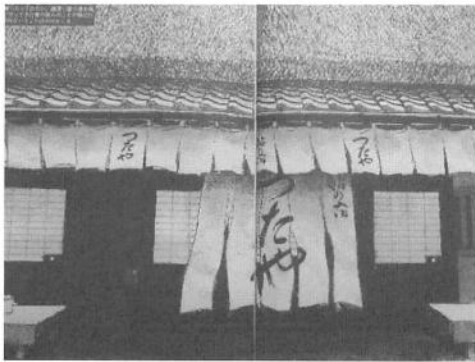
次に4年後に出版された第二冊目の『京に暮らすよろこび』について申し上げます。この本は章子さんが終生親しんだ京都の街の心に残る様々の店舗についての紹介と店にまつわるその“なりわい”の姿、章子さんの心温まる“ふれ合い”が沢田さんの絵とともに語られております。導入部の絵に、一乗寺の詩仙堂、本願寺の前庭、知恩院の山門、二条室町辺りの民家の屋根と祇園甲部の屋根の鳥瞰図、洛東遺芳館、鳥居本の鮎茶屋の“つたや”、裏千家辺りの界限、車屋町御池上ルの蕎麦の尾張屋、それらの情景を沢田さんの絵で紹介し、京の伝統的景観の最たる京都らしい情景を見せておられます。

次にこの本の中核として祇園祭のレポートがあり、それは活力のある日本有数の大きな祭、文化財としての鉦や山の保存と継承、それに巡行と祭事の運営方法を述べておられます。この事とは打って変わって、一方では町こわしのマンションの出現、町屋がなくなってフェンスで囲まれた空き地、立体ガレージ等、街並の崩壊と行事にかかわる人達の人力の衰退、華やかな現象と同時に京の街が抱える課題を、国語学者と同時に社会学者であった章子さんの京の文化に対する警告を読むことができるのであります。このあと街のお気に入りの店舗の紹介が続きます。

祇園石段下の今は無き果物屋の八百文、店舗ではないが白川巽橋、古川町に抜ける白川の橋、八坂の塔周辺、高台寺門前、今のねねの道あたりと沢田さんの絵が続き、また今は無き梶井基次郎の寺町二条のレモンの店“八百卯”等、消えてしまった悲しい景観の物語が続きます。漬物屋の“竹田”（竹屋町衣棚）、寺町四条上ルの“三木蓬萊堂”（お茶）、熊野神社東入ルの“竹村玉翠園”（お茶）。老舗ではないが、鼓月から始まり、鶴屋某、若狭屋某、亀屋某、鎰屋某、俵屋に虎屋等の紹介、桂大橋西の中村軒、上御霊神社前の尾張屋等など、和菓子の老舗を数々記述されています。次に川端道喜のちまきと皇室とのエピソード、烏丸二条のカステラの越後屋、花遊小路の写真店の“ワンダス館”（現在富小路四条下ル）、記念写真にまつわる文章さん夫妻の恋の記述など誠に面白いくだりがあります。次に大丸の前の“菊光堂”（茶道具）、柳馬場四条上ルの“ぎぼし”、御幸町錦上ルの

旅館“近又”、東洞院三条の水野印房、寺町二条の芸艸堂（出版）で文章さんが出版した『仙人掌帖』の話等々、又観世流の謡曲を習うのに向日市に在住された脇田晴子さんにお世話になった事、浦田保利先生について謡曲の修業をされた事が記されています。それから建物とは無縁の人が二人紹介されています。扇子の骨を作る扇骨師の荒谷祝三さんと、染師の池田和夫さんである。又建築探訪となりますが、堀川今出川上ルの藤田家、堀川通西入ル二条城北の大塚氏宅、大黒町五条下ルの料亭“はり清”等が沢田氏の絵で現れます。次に古い町屋の探訪から離れて、古い洋館の数々が美しい絵でレポートされます。

終章に近く調査の方法は個人や個別の建物ではなく、あちこちの界限・空間の報告に変わります。学生時代からの京大周辺すなわち百万遍界限の進々堂はじめ個性的なお店、伏見、山科等の社寺、北野神社の周辺、出町から貴船・鞍馬、嵯峨野から鳥居本・清滝のあたりと巡り、最後には又市内中心部の新町通りの南観音山をとりまく路地とそれを支える人達の生活とたくましい町屋保全へのエネルギーを讃えておられます。路地に生きる人々の習慣すなわち月当番、掃除、メンバーの義務と賢明なつきあい方、路地の表と裏の住人の違い等々、路地の思想を根幹に据えてこそ京都の明日は存在すると彼女は明言して、この二冊目の本は終わっています。

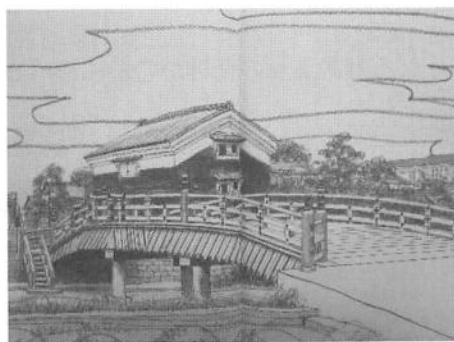
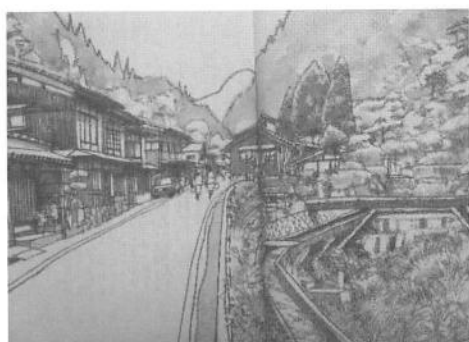


さて三冊目の『京の思い道』の紹介に入ります。章子さんはこの本の見出しに〈京に入る道、京から遠ざかる道、街道筋の町や村、そこに生きるたおやかな人々、祭りや行事、京に住んで70年、心に深く残る美しい自然との出会い、人々の豊かな暮らし〉と書いておられます。ついでに京都には他の都市に見られるような、場末というような所がなく、市域全体が「うらぶれ」ていない、充実した都市であると言い切っておられます。伏見は特に京都と対峙する文化圏だということで、酒の産地として栄える町、伏見稻荷のように稲荷社の元締め存在と門前町を高く評価しておられます。

それからそれぞれの道の事を街道筋という設定をして、周山街道、鞍馬街道、敦賀街道、丹波街道、西国街道、奈良街道、国道1号線（山科八幡）と分けて、沢田さんの絵とともに迎っておられます。

周山街道は北桑田の山村、美山町の武正旅館、茅葺き屋根の群落、佐々里の村、常照皇寺の桜と静謐な里を語り、鞍馬街道では宝ヶ池から山端の平八茶屋、鞍馬の匠斎庵、杜若の杜若家の事、弓削町の高宮さんの林業への執着の事業。敦賀街道では久多の常本佐喜子さんの山村生活、志古淵神社の花笠踊り、花折峠の近代化の波。丹波街道では園部町の思い出、八木町の山寺帝釈天の鐘、亀岡の出雲神社、八木町の木喰仏の話など。西国街道では終生住み馴れた向日町西山の夕焼け、乙訓の古社寺、柳谷観音と伯父さんの岩橋武夫さんの目の治療のお祈りの事、光明寺の紅葉、歴史の激動に満ちた大山崎油座の離宮八幡、天王山と三川合流の日本の大動脈たる地点、古い道筋の民家、宝石のように光る国宝妙喜庵の茶室、隣の村の水無瀬の里の事等々。奈良街道は、桃山、六地藏、木幡、黄檗、玉水、上狛、祝園等、美しい地名に感動し、戦争が終わった時、父文章さんと訪ねた浄瑠璃寺の九体仏と吉祥天女の事、笠置を越えた山村の南山城村、月ヶ瀬村の梅林、茶の産地和束と宇治田原に残された村落の古い家々の事等。

これで『京の思い出』は終わりますが、章子さんの目は懐かしい記憶と、訪ねる度に出会う人々の古い昔の生活様式を守る心、郷土への熱い思いが三冊の本になっていることに気付くのであります。



このまとめの文章には沢田さんの絵を紹介することは出来ませんが、講演の当日は皆様にスライドの画像で100枚近い風景を見ていただきました。今回のレポートを終って、京都人に愛着のあった失われた店舗や情景、又逆に章子さんのレポートされた当時のまま消えずに京都の街の貴重な文化遺産として残っている建物や景観の存在、30年の歳月の間に、京都の街がいかに変化してきたかという事を皆様もこの三冊の本をぜひご覧になって感じていただきたいと思います。

参考文献 杉田博明・三浦隆夫・京都デザイン研究所 作画『新・都の魁』京都新聞社編 1989年

寿岳章子著・沢田重隆 絵 『京都町なかの暮らし』草思社 1988年

(同上) 『京に暮らすよろこび』1992年、(同上) 『京の思い出』1994年